

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

現場の実践者が日々の体験をレポートに書く方法の  
開発：短歌をモデルにした試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): Tanka, experience, sense, report writing, method development 作成者: 守山, 正樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000515">https://doi.org/10.15019/00000515</a>

著作権は本学に帰属する。

## その他

### 現場の実践者が日々の体験をレポートに書く方法の開発：短歌をモデルにした試み

守山 正樹<sup>1)</sup>

現場での実践者（日々の仕事や生活に関連した現場に実践的に関わる人々）にとって、現場での経験と研究的な志向の何れもが、経験を知識化する上で重要である。しかし近年、研究が高度化する中で、事前に準備した組織的な研究でないと、発表が認められず、論文も雑誌に受理されにくい傾向が強まっている。しかし実践者が現場から学び続けるためには、組織的な研究以上に、現場での経験や感覚をレポートにして発表し、現場から学術的な場面に至るまで、交流を進めることが重要である。そこで本研究では、日本古来の経験と感性を表現する詩的な形態、短歌に注目し、短歌の発想を取り出し、その発想でレポートを書くためのワークシートを開発・試行し、新たなレポートの書き方を提案する。このワークシートを用いることにより、実践者は通常の研究論文を書くのとは異なった以下の順番で、書き、考えることになる。それらは、①まず報告したい結果としての経験（感覚も含む）の具体、②前項の経験の、方向を変えた見直し・再考（考察）、③その経験に至るまでの経緯（緒言）、④その経験の前提となった状況や方法、⑤以上書いて来た内容への文献的考察、そして⑥以上の全記述（レポート本体）に相応しい題名、である。そこで本稿では、国内での健康相談、及び国外での集中講義という2つの実践場面を取り上げ、開発したワークシートの適用を試みた。本ワークシートを活用して意味のあるレポートを書くためには、従来の学術論文執筆に際して求められる論理的思考に加え、経験と感覚を現実的に、実在に即して具体的に想起し、記述できる感性的思考を訓練し洗練させる必要があり、さらなる開発研究が必要である。

キーワード：短歌、経験、感覚、レポート作成、方法開発

#### I はじめに

被災地支援・国際協力・グローバルヘルスなどの現場では多くの実践と出会いがあり、様々な経験がなされる。実践者が野外調査研究の経験が豊富な場合、経験を記録し発表する事はそれほど困難ではない。しかしそうでない場合、貴重な経験をして「その経験の何をどのように書き表し、どこでどのように発表したらよいか」が分からず、経験のみで終わることも多い。さらに研究倫理や研究の在り方に社会的な関心が高まる中で、事前に文献を集め、仮説を立て、倫理も含めた研究計画を整え、それに沿って進められた研究でないと、レポートが正規の研究成果として認められず、学会誌等に受理されにくい状況が増えていると感じられる。

こうした状況は「保健・医療・看護・福祉分野でのエビデンスを重視した研究」「論理実証主義に基づく計画的・体系的な研究」の発展・高度化に寄与している。その一方、現場で活動する個人・実践者が「そこで出会い経験したこと」「感じ考えたこと」を元に「イメージや言葉を表出し、考え方を組み立て、

そこから現実の姿に迫ろうとする研究」「参加的または構成・構築的視点からの研究」の機会は減少する。しかしこれは好ましい状況ではない。

世界が複雑になり、従来からの論理実証主義では割り切れない混沌として流動的な局面が増えている現在、まず現場に足を踏み入れ、何かを体験し、そこでの「出会い、感じること」「経験、感覚」を出発点としてレポートを書き、「感じ方・考え方・言葉の出し方／組み立て方・現場への接近の仕方」を訓練し洗練させることは、災害援助・国際協力・グローバルヘルスの分野はもとより、他のどのような現場を大切にしている分野においても求められるであろう。そこで本研究試行では、そのようなレポートの書き方を検討し、開発することを目的とする。

#### II 倫理的配慮

本研究試行の全過程は倫理原則の遵守のもとに行った。本試行の原点となった「まず印象に残ったことを書き留める」の発想は福岡大学でのイメージマップに関する研究活動の中で培われ、NPO 法人ウェルビーイングでの実践活動を通して発展したものである。NPO の全活動は事前に同 NPO 倫理委員会の承

1) 日本赤十字九州国際看護大学

認を受けてなされており、NPO 活動での参加者の参加記録提出は任意である。得られた記録は社会貢献と学術発展の目的のみに使用すること、一定期間後には全記録を破棄すること、匿名性を保持すること、等々を NPO 活動の参加者に対面の上、口頭で説明し同意を得ている。一方、印象を書き留める方法の研究面については、2011 年度に福岡大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得ている（承認番号 387、研究課題名：東日本大震災後の生活環境認識の理解；バリアフリーのイメージマップ開発と参加的復興支援）。

### Ⅲ 経験や感覚を表現するモデルとしての短歌の可能性

いわゆる学術論文には、「主観を避けて言葉を出す」「データに基づいて書く」「緒言→対象と方法→結果→考察の順番で書く」など、学術論文としての言葉の出し方、言葉の組み立て方がある<sup>1,2)</sup>。では、本研究試行が追求する「経験や感覚を報告するレポート」には、どのような言葉の出し方、言葉の組み立て方が適切だろうか。「学術論文とは異なる書き方を開発する」として、その際、書き方の参考になるモデルとして何が適切だろうか。

#### 1. なぜ短歌か

「学術論文やレポートの書き方」という主題からいったん離れて、ともかく経験したこと感じたことを書く形は何か、と問いかけてみると、日記・短歌・随想・ブログなど、文章の形はたくさんある。現実の経験を中心にして書くという事は、実は、それほど特別なことではない。文章の中でも、特に感性的な表現を重視する詩のジャンルに属するものとして和歌（短歌）がある。そこで本研究試行においては、短歌を感性的な表現の出発点とした。

短歌に注目した学術的な理由としては①日本人が古代から慣れ親しんでいる詩的表現の代表である<sup>3,4)</sup>、②詩の中でも世界で最も簡潔な文章表現の形として世界的に認められている<sup>3,4)</sup>、の二点が挙げられる。

短歌を出発点とする理由を個人的に分析すると、今年 94 歳になる筆者の母が短歌を作ってきた事実が想起される。日々の経験を詠む（書く）短歌の作成を、筆者の母は筆者が子供の時からこの 50 年間、現在に至るまで毎日行っている。筆者が子供の頃から折を見ては、母は筆者に短歌を書くことを勧めて

きた。母の勧めにもかかわらず、筆者は短歌を書いたことがない。しかし、短歌の「経験や感性を表現する方法としての可能性」については、子供の頃より関心を持っていた。

上記のような 2 つの理由（学術的及び個人的）から、レポートを書き始めるモデルとして短歌を用いることにした。

#### 2. 短歌的な発想、言葉の組み立て方を、国内の三文献で検討する

では、短歌では、経験や感性をどのように言葉にするのだろうか。どのように言葉を組み立てるのだろうか。要するに短歌はどう書くのだろうか。この質問をこれまでに何回か母にぶつけたことがある。母の答えはいつも「経験したこと、感じたことを、そのまま、ありのままに形に、言葉にきなさい」だった。確かに母の言うとおりがかもしれない。しかし「そのまま、ありのままに」と言う部分をもう少し具体的に説明できないと、レポートを書くモデルとして位置付けることは難しい。

そこで以下では、文献 a：最も古い歌論として知られる紀貫之著「古今和歌集、仮名序」912 年<sup>5)</sup>、文献 b：20 世紀後半に短歌を現代的な形でリバイバルしたと評価されている俵万智著「考える短歌、作る手ほどき、読む技術」2012 年<sup>6)</sup>、さらに、比較のために、短歌よりさらに短く世界最短の定型詩である俳句を取り上げ、文献 c：俳句の作り方の入門書として定評のある高浜虚子著「俳句の作りやう」1952 年<sup>7)</sup>を参照した。短歌・俳句を作る際の出発点となる「発想の方向性」は各著書の冒頭部分に存在したため、その部分を以下に引用する。「言葉の組み立て方、考え方の要点(要点)」については文献 b・c の場合、本の章立てが概要を明示していたため、そちらを引用する。

(a) 紀貫之「古今和歌集、仮名序」912 年<sup>5)</sup>

・冒頭部分「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける 世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり 花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生きるもの、いづれか歌をよまざりける 力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をも慰む

るは、歌なり」

・要点：明確な形では示されていない。

(b) 俵万智「考える短歌、作る手ほどき、読む技術」

2012年<sup>6)</sup>

・冒頭部分「短歌は、心と言葉からできている。まず、ものごとに感じる心がなくては、歌は生まれようがない。心が揺れたとき、その『揺れ』が発点となって、作歌はスタートする。それは、人生の大事件に接しての大きな心の揺れであるかもしれないし、日常生活のなかでのささやかな心の揺れであるかもしれない。」

・要点

①「も」があったら疑ってみよう。

②区切りを入れてみよう。思い切って構造改革をしよう。

③動詞が4つ以上あったら考えよう。体言止めは1つだけにしよう。

④副詞には頼らないでおこう。数字を効果的に使おう。

⑤比喩に統一感を持たせよう。現在形を活用しよう。

⑥あいまいな「の」に気をつけよう。初句を印象的にしよう。

⑦色彩をとりいれてみよう。固有名詞を活用しよう。

⑧主観的な形容詞は避けよう。会話体を活用しよう。

(c) 高浜虚子「俳句の作りやう」1952年<sup>7)</sup>

・冒頭部分「俳句を作りたいという考えがありながら、さてどういうふうにして手をつけ始めたらいいのか判らぬためについにその機会無しに過ぎる人がよほどあるようであります。私はそういうことを話す人にはいつも『何でもいいから十七字を並べてごらんなさい』とお答えするのであります。」

・要点

①まず十七字を並べること。

②(俳句を作るに際して、ある主題を得たならば) 題を箱で伏せてその箱の上に上って天地乾坤(天と地のさまざな方向)を睨めまわす(ジロジロとにらみつけるように見回す)ということ。

③じっと眺め入ること。

④じっと案じ入ること。

⑤埋字(17文字のうちのいくつかを空欄にしておき、そこに新たな言葉を埋め込んで考えてみる) 1

⑥埋字 2

⑦古い句を読むこと、新しい句を作ること。

以上の3文献よりまず冒頭部分の記述を見ると、紀貫之<sup>5)</sup>は、日本人の生活そのものの中に短歌を詠むような心の持ち方、言葉の出し方があることを示している。俵万智<sup>6)</sup>は「生活の中での心の揺れ」の大切さを指摘している。高浜虚子<sup>7)</sup>は「何でもいいから17文字を並べてみる」とまず実践する事を強調している。

次に要点を見ると、俵万智<sup>6)</sup>は一つひとつの文字を書きながら、その中で求められる日本語としての言葉の使い方に注意を向けることを重視している。一方、高浜虚子<sup>7)</sup>は「文字を並べる、箱の上に立つ、睨めまわす、眺め入る、案じ入る、埋字(から考える)」など様々に体を動かして考える「身体的な思考」を重視している。

以上の三文献を比較参照した結果、いずれにも物の見方・考え方・日本語の使い方について多くの示唆が含まれていることが明らかになった。また日本人としての発想や日本語の発想・言語表現を洗練させることの重要性が読み取れた。その一方、本研究試行で求める“レポートを書く実践的な方法”として「どのように言葉を出し、どのように言葉を組み立てるか」、すなわち言葉の構成的側面については、これらの三文献には明示されていなかった。これは三文献の著者が「言葉の構成的側面」を見過ごしていたのではなく、何れの著者も、同じ日本語を話し、同じ日本文化の背景を共有する同時代の話者に向けて、話し手中心に文章を書いており、そのために、わざわざ「言葉の構成的側面」にまで言及する必要を感じなかった、と推測された。そこで①短歌の発想を受け継いでいる、②日本語や日本人の特性に依存しすぎない、③言葉の構成に言及している、の3条件を大切に、さらに適切な文献を求めて検討を続けた。

### 3. Tanka の検討

“短歌”だけでなく、英語の“Tanka”も含めて文献検索を行った。Tankaの論考は歌集に関連してなされる場合が多いが、歌集は学術的な文献検索では見出せない。そこでTankaの文献目録としては最も

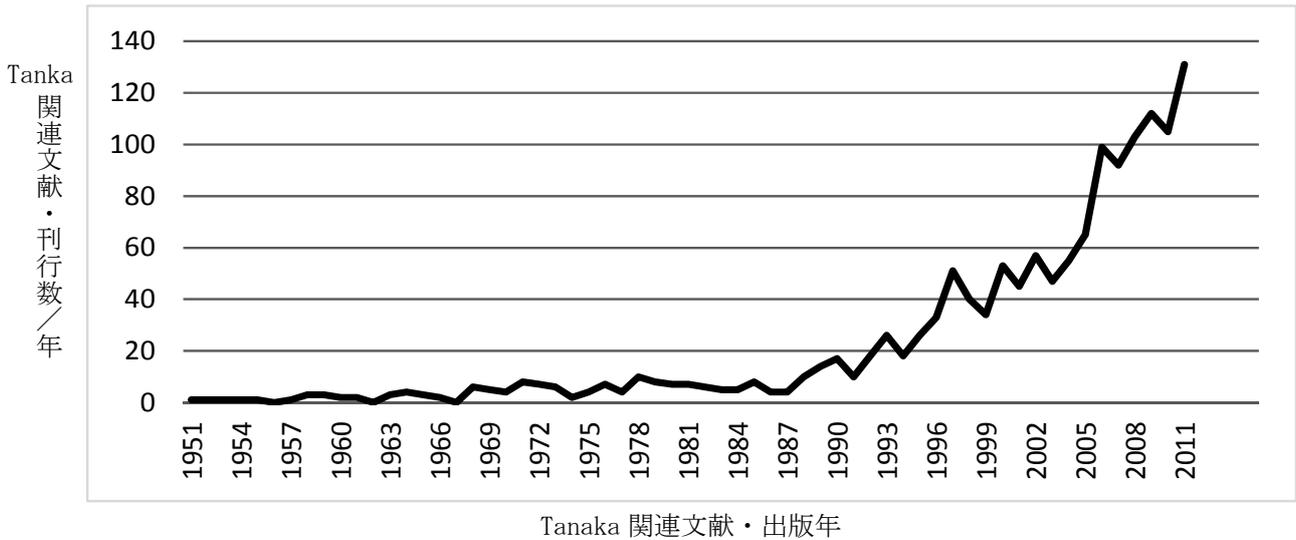


図1 Tanka 関連文献の出版年と刊行数

包括的だとされる M. Kei の目録で関連文献の動向を分析した。用いたのは M. Kei が 2006 年から公表している英語の短歌 (Tanka) についての文献目録 (Bibliography of English-Language Tanka) の 2013 年版<sup>8)</sup>である。この目録には 827 名の著者 (歌集・歌会などの組織も含む) のアルファベット順に 1400 編の文献が整理されている。この Tanka 文献目録<sup>8)</sup>より、筆者が文献の出版年を抜き出しグラフ化した結果を図に示す (図1)。

1980 年代半ばまでは年に数編が出版される水準であった Tanka の文献が増加し始めたのは 1980 年代の終わりである。1994 年に英語による最初の Tanka ジャーナルとして刊行された Five Lines Down は 2 年間しか続かなかった<sup>8)</sup>。その後、1996 年に発刊された American Tanka は現在も刊行が続けられ、2016 年号には 19 篇の Tanka が掲載されている<sup>9)</sup>。その後、2000 年に Tanka Society of America が設立されて以降は特に Tanka 関連の文献の出版が急激に増加した。Tanka Society of America は設立当初から International Tanka Contest を実施して Tanka の普及に努め<sup>10)</sup>、2004 年から刊行を開始したジャーナル Ribbons には近年毎号 200 篇以上の Tanka が掲載されている<sup>11)</sup>。

以上のような Tanka 文献目録の分析から、筆者は英語圏での Tanka の普及に大きな貢献をしている Tanka Society of America における作歌の考え方に関心を持ち、その中心である Jeanne Emrich の方法に注目した。Jeanne Emrich の実践的な作歌の方法

は、Tanka society of America が英語を母語とする短歌指導者 (Tanka teachers) のために編纂した本「Tanka Teachers Guide」<sup>12)</sup>の中に示されている。同書 49～50 頁に示されている Jeanne Emrich による方法の解説<sup>13)</sup>は、前述の 3 条件を満たした分かりやすい解説だと判断された。この解説を筆者の翻訳により以下に示す。

・短歌を書くためのスタート・ガイド (A Quick Start Guide to Writing Tanka)<sup>13)</sup>

- ①自分が経験した瞬間から 1 つか 2 つの簡単なイメージを考え、それを明確な言葉で書く。見たことを味わったこと触れたこと、かいたこと、または聞いたこと。それを 2 行が 3 行で表現する。
- ②その瞬間を経験したときに、あるいはその瞬間の後でそれについて考える時間がある時に、どのように感じたか何を考えたのかを振り返る。
- ③振り返って思い出した感覚や考えを残りの 2 行か 3 行に書く。
- ④全てを結合して 5 行の中に入れる。
- ⑤こうして書いた 5 行のうち、3 行目を pivot line (転回点) にすることを試みる。3 行目は 1・2 行目、また 4・5 行目とも関連し、文法的にもより意味のある形になる。こうするために既にそこにある第 3 行目と、他の行を入れ替えることもある。

Jeanne Emrich<sup>13)</sup>による 5 段階中の第 1 段階①は、

紀貫之の「心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり」、俵万智の「心の揺れが出发点となって(作歌する)」、高浜虚子の「何でもいから17文字を並べてみることに相当するが、より具体的に表現されている。よって、この Emrich の第1段階を参考に、新たなレポートの最初の部分を書くことを考えた。

次に注目したのは Emrich の第2段階である。第1段階がまず書いてみる事を強調している一方で、第2段階では、第1段階を振り返り、そこで生まれた感情や思考を書くことを勧めている。このように、インタビューなどでまずある出来事について何らかの情報を得た後、同じ出来事について、別な人にインタビューするなどして、異なる方向から情報を得て比較し、三角測量をするような形で観察の精度を高め、考察を深めていくことを、質的研究では Triangulation と位置づけている<sup>14, 15)</sup>。このことから考えると、Emrich の第2段階は第1段階に対して、一種の Triangulation を行っていると考えられる。

よって、Emrich の第1段階と第2段階を応用する形で、新たなレポートの中心部分を構成することを考えた。

さらに Emrich の5段階で興味深いのは、Pivot Line の考え方で、最初に書いたものを、並べ直し、より論理的に、また感性的に、形を整えていることである。

よって、新たなレポートの書き方において、まず「結果」、続いて結果を方向性を変えて振り返ったもの(熟考あるいは一種の考察)を書いた後、残りの部分については、書きやすい部分から書き、最後に、各部分を並べ直して、最終的なレポートの形に整えることが考えられる。

#### IV 新たなレポートの書き方の提案と試行

##### 1. 新たなレポートの執筆順序

この順番での書き方を、より具体的に説明すると以下ようになる。

①まず「結果」を書く。

「強く印象に残ったこと、人にその様子を伝えたいこと、感性に響いたこと等々」を「感じるまま・観察したまま」に書き留める。無理に言葉を整えない。独り言的に書いても良い。言葉が思い浮かんだ順番、言葉が組み立てられる順番に書く。相手がいるのであれば、対話を書く。その時の匂い・音・風・

情景も書き留める。

②次に「考察」を書く。

しばらく時間が経過した後、やや異なる視点で、上記の「結果」を振り返って、分析的に書く。今思うと「私(相手)の状態は~のようだった」「私(相手)の話方・書き方には~のような特徴がある」「私(相手)には~のような感情や下心があったようだ」「私(相手)の~のような経験・状況が今回につながった」「今回のことで私(相手)はその後~のように変化した」等々。

③レポートの残りの部分を書く。

・「はじめに」を書く。

「私はなぜこのレポートを書くに至ったのか」「このレポートで伝えたいのはどのようなことか」を分かりやすく説明的に書く。

・「方法」を書く。

「私が上記の結果を得た時に(そう思えば)使用していた方法」を書く。単に日ごろから感性・観察を研ぎ澄まし、その瞬間に備え、ハッとする瞬間をとらえて文字にしたのか。特定の状況や発言が生まれることを期待して、何らかの場の設定をしたり、ワークシートを使ったり、きっかけとなる働きかけを行ったのか。何らかの働きかけを行っていれば、その「働きかけ」を「方法」と位置づけ、その「方法」を書く。

・「文献的考察」を書く。

ここまで書いてきたレポートの内容をさらに発展させたり、既存の論考と関連させたりするのに役立つ文献があるなら、その文献を引用して必要な考察を書く。

##### 2. レポートを書くためのワークシートの試作

以上を組み立てて、全体をレポートの形、通常のタイトル、初めに、方法、結果、考察の形に組み替えるためのワークシート(図2)を作成した。

経験・感覚レポート・ワークシート

**多様な言葉にする ↓↓**

1 報告したい経験・感覚・対話は？（結果）

2 上記の結果を別な方向から考える：  
（再考・熟考・考察）

- ・しばらく時間をおいて考える
- ・書いて並べて描いて考える
- ・人に話す中で考える . . . . .

**報告の形を整える ↓↓**

3 左記の経験／感覚／対話を得るに至った状況／場面や対象は？（緒言、対象）

4 左記の経験／感覚／対話を得た際、そういえば用いていた前提や方法は？（方法）

5 改めての考察や文献（文献的考察）

6 このレポートの題名は？（題名）

### 3. ワークシート試行事例

2つの事例にワークシートを試行的に適用した結果を表1と表2に示す。

表1は、福岡のNPO ウェルビーイングが行なっているホームレス者の歯科相談に参加した歯科医師 M氏が、相談の直後に書いた振り返りシートの記録が

表1 ワークシート記入事例1

執筆順	記述内容
1 結果	<p>まず持って来てくれた問診表から年齢を知って驚いた。若い!! なんてこんな若くて元気な子がこんなところにいるんだろうか? それにしても親ごさんはどこにいるのかしら、彼を支える人はいないのだろうか? 口の中のことより、なんでこんな若者がここに居るのか? という疑問と驚き、怒りの感情のほうが強く、口の中のことなんか気にならない、というくらいインパクトがあった。</p> <p>『どっか痛いとか気になることある?』と、気持ちは置いて、私はできるだけ親しみやすい、おばさんの対応を心がけた。</p> <p>『一日3回磨いているし問題なかるう?』</p> <p>『それはすごいね! 見せてくれる?』</p> <p>彼は、しっかり正面から私の顔を見て話をするというより、若干上目遣い、それと体は、はずかい。彼は右半身をこちらに向けている。そこから私は、彼の右の犬歯の捻転と歯肉炎が確認できる。</p> <p>『そんなにしっかり磨いているならきつと綺麗なんじゃない! 見せてくれる?』そう言うと、『虫歯はあるかもしれんけど』とちょっと構える感じがある。</p> <p>彼は、心配するというより防御して構えるといった感じ。もしかしたらいつもしかられたり、文句を言われたりしているのかなと感じる。私は、できるだけ悪いことは言わない。受容の気持ちを伝えられるように、気を付けて検診する。彼は磨いている、磨けていると思っているが、実際にはコンタクトカリエスもあり、歯肉炎もある。これをストレートに彼に伝えれば心を閉ざして聞いてくれないと思い、私はまず歯列のことから話を始めた。</p> <p>『ここ八重歯になっているよね。ワカル?』</p> <p>『このところの歯ブラシの当て方教えるからね。歯ブラシを立てて歯ぐきに当てるのが綺麗に磨くコツ!!』</p> <p>あまり歯肉から出血をさせるのも気になり、そこそこの当て方の指導をする。</p>
2 考察	<p>先日のホームレス者歯科相談での対話メモから、私があの時行った対話の内容を振り返る事は、興味深い経験だった。同時に、私が普段、一歯科医師として、自分の診療所で患者さんを行っている対話を振り返ることもつながった。改めて記録することで、この対話は、かなり水平に行われていることに気づかされた。</p>
3 緒言	<p>予防歯科の臨床では、患者との対話が大切だと言われるが、歯学部で具体的な対話の指導があるわけではない。また NPO では、長年、対話を大切に様々なフィールドで歯科相談・診療を行っている。しかし対話の実際は明らかでない。そこで①対象者に新たに会おう、②診療所での診療よりも時間的余裕がある、③歯の状況に加えて生活支援も必要な可能性がある、という条件が複合するホームレス者の健康診断を取り上げ、より良いコミュニケーションの方法を求めて、自分自身のやり方の観察・分析を試みた。</p>
4 方法	<p>2013年4月、NPOとして歯科保健相談を行った直後に、歯科医師である私と対象者との間の対話やその時の私自身の気持ち、感覚を思い出し、書き出した。対象者が話してくれた内容には、個人的な情報が含まれており、ここでの記録からは除外している。</p>
6 題名	<p>ボランティアの歯科相談における、ある歯科医師のコミュニケーションの事例検討</p>

表2 ワークシート記入事例2

執筆順	記述内容
1 結果	<p>ベトナム、N看護大学修士課程での集中講義、第1日目が終わった。</p> <p>「無事に・・・」と書きたいところだが、実はとんでもないことがわかった。</p> <p>今回の集中講義では「私が最も関心のある参加的/質的研究の話をすれば私の役割が果たせる」と理解して、準備してきた。しかし今日分かったのは「N大学の受講生の大多数は、質的研究にはまだ関心が向いておらず、彼らの関心の中心は依然メディカルモデルによる量的研究/実験的研究にある」という事実だ。</p> <p>日本でも30年前はそうだったが、現在はわが大学の修士論文のテーマを見ても、研究の比重は量的研究から質的研究に移ってきている。一方ベトナムではまだそのような研究的な関心の推移が起こっておらず、現在でもメディカルモデルが中心のようだ。</p> <p>結局私の授業準備は役立たず、昨日、米国B大学のシラバスを参考にして急遽作成した学習項目も非現実的だ、と分かった。B大学は以前より、N大学に新設された修士課程に教育支援チームを派遣し、B大学のシラバス(英語)を用いて集中講義(英語)を行っている。しかしこちらは支援チームも無く、シラバスがどうなっているのかも知らないまま、一昨日、一人でN大学に到着した。私の準備が役立たないのであれば、第2日目以降の集中講義は、本来ならば中止して、即刻、宗像に戻りたいところである。しかしあの熱心な57名の受講生のことを考えると、このまま日本に帰るわけにもいかない。</p> <p>そこで方針を転換し「今日から、ともかく3日間は量的研究の話をしよう」と覚悟を決めた。</p> <p>私は医学部の公衆衛生学教室出身なので、量的研究の経験もあり、それを話す事はもちろん可能だ。しかしこの20年来は参加的・質的研究を中心に行って来ているので、突然に大きく授業の方向性を変えることは、それほど簡単なことでは無い。ベトナムの看護大学における授業のニーズを、事前にもう少し正確に把握していたら、このようなことにはならなかったはずで、その点は悔やまれる。</p> <p>現在は5時、今日の授業開始は8時、これから新しい授業の準備をゼロから始める。</p>
2 考察	<p>受講生Mさんのあの爆弾発言「私たちが勉強したいのは質的な研究ではなくて量的な研究です」が初日(月曜午前中)にあってから2日半経過した。今日は木曜日、昼まで量的な研究の話を続けた。しかし初日には予想できなかった事態が生じた。何人かの受講生が、あのMさんも含めて、不思議なことに「量的なことはいいので、今度は質的な研究について話を聞きたい、先生が用意してきたテーマで授業をしてください」と言い始めた。日本での授業では、普通学生はこのような率直には発言しないように思う。そもそも今回の、このレポートの発端となった“月曜午前中の爆弾発言”は日本では出難いように考える。なぜこのような差が生まれるのだろうか。国民性の違いに帰してしまうと、考えが先に進まなくなる。別な理由を考えていて思いついたのは、私自身が最初から拙い英語でナラティブに学生たちに話しかけ、物語るように授業をして来たことだ。私の必死でナラティブな授業が、学生たちに伝わり、学生たちのナラティブな、率直な発言が引き出されたのだろうか。</p>
3 緒言	<p>「ベトナムの看護大学で講義をしないか」と誘われたのは、昨年のものである。その後、なかなか詳細が分らず、N大学に何回かメールで問い合わせ、やっと分かったのは「修士課程の学生が57名、1日8時間(休憩を除いて実質6時間)、合計10日間の集中講義」という設定で、求められているテーマは「研究について」というところまでだった。筆者は看護を専門とするわけではないので、看護研究の話をするのは難しい。そこで筆者がこれまで行ってきた対話的・参加的・質的な接近について話をすることにした。</p> <p>国際保健(Global health)とは、グローバルレベルでの人々の健康課題、あるいはそれについて研究する公衆衛生、疫学、医学、看護学、人類学、開発経済学、政治学、社会学などの複合的な学問領域を指す。今回の私の仕事は研究でもプロジェクトへの従事でもない。しかし日本から出て、日本よりも人口構成が若く、アジアで経済発展を続けている社会主義の国で、その学生たちに役立つような集中講義を行うことは、視点を変えれば国際保健のチャレンジと言えるかもしれない。ではそのチャレンジの中核は何だろうか。課題は何だろうか。それらを確かめようとして日本を後にした。</p>
4 方法	<p>臨機応変に授業を組み立てるためには、授業内容を固定せず、ある部分をひらいたオープンな形にしておく必要がある。そのため、配布資料とマイクロレクチャーは用意した上で、授業の進行は全てホワイトボードとマーカーを用い、ナラティブに語りかける形で行なった。</p>
6 題名	<p>ナラティブに教えることが、ナラティブに学ぶことを引き出した:ベトナムの看護大学における集中講義の試み</p>

もとなっている。こうした振り返りシートを用いた記録を同 NPO は日常的に作成しており、記録の一部は、NPO に義務付けられている社会的問題提起・問題還元として、同 NPO の倫理委員会の承認を得た上で、公表している。今回は公表された M 氏の記録の一部を「結果」と位置づけ、ワークシートの記入例 1 とした。

表 2 は筆者が 2016 年 6 月にベトナムの N 看護大学で集中講義を行なった際、講義初日に受講者 M さんからもらったコメントとその直後に考えた内容を結果としている。その結果を振り返る中で、国際保健の意味を問い直すような問題提起が得られたため、二番目のワークシート記入例とした。

## V 考察

本研究試行においては、現場での経験や感覚を出発点として、そこからレポートを書く方法について検討し、日本に特有な文章表現を出発点とすることを試み、短歌の書き方をモデルにレポート作成のためのワークシートを開発した。

短歌や俳句は日本文化に根ざした文章表現の方法である<sup>3)</sup>。世界最短の詩的な表現方法として位置づけられ<sup>4)</sup>、英語圏の人々が短歌や俳句に親しむ機会も増えている<sup>12)</sup>。

俳句の場合は 17 文字、短歌の場合は 31 文字と極めて少ない文章量で、生活世界の全てを表現する方法であるため、人の思考内容のエッセンスを表現し理解する方法として、介護や看護の現場で使われる場合もある<sup>16, 17)</sup>。看護教育の方法論としても使われている<sup>18)</sup>。しかし保健・医療・看護・福祉などの領域で、短歌自体を作るのではなく、短歌の発想でレポートを書く試みはこれまでに報告されていない。本研究はまだ試行的段階にあり、ワークシートについても、さらなる改良が必要だと考えられる。

またワークシートに記入を始める以前の課題として、豊かな経験を積めるように、経験し感じとる内容を深められるように、感覚的な能力を養成する必要がある<sup>19)</sup>。これまでの保健・医療・看護・福祉領域の教育では、医学モデルを援用して、論理的に考え書く訓練はなされているが、感性的な教育はまだ不十分であり、方法論の検討もこれからの部分が多い。

本研究での、経験や感覚をレポート化する実用的な方法開発は、感性を大切に思考と表現の方法

に向けた小さな一歩であり、さらなる研究が必要である。

## 謝辞

本論考のもとになった、日々の体験をレポートすることの大切さを具体的に学んだのは、10 年以上に渡る NPO の活動を通してです。NPO においてホームレス者の歯科保健活動プロジェクトを主催され、筆者に参加の機会を作ってくださった西本美恵子氏、またホームレス者と歯科医師との出会いを、生き生きとした言葉で書きとめ、対話によるレポートの可能性を示してくださった松岡奈保子氏をはじめとする NPO 法人ウェルビーイングの皆様、深謝申し上げます。

(受付 2016. 8. 25 採用 2016. 12. 26)

## 文献

- 1) Bailey S.: *Academic Writing, a Practical Guide for Students*. 1-141, London, Nelson Thornes, 2003.
- 2) Murray R.: *Writing for Academic Journals*. 1-98, Berkshire England, Open university press, 2005.
- 3) Maynard S. K.: *Japanese Communication, Language and Thought in Context*. 1-226, Honolulu Hawaii, University of Hawai'i Press, 1997.
- 4) Greene R. (ed.): *The Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* (4th ed.). 1528-1530, Princeton New Jersey, Princeton University Press, 2012.
- 5) 紀貫之：古今和歌集、仮名序. 1-2, 912 ; 谷岡七左衛門らによる筆写本. 1660; Amazon Kindle 版、2015.
- 6) 俵万智：考える短歌、作る手ほどき、読む技術. 1 - 37, 東京, 新潮社, 2012.
- 7) 高浜虚子：俳句の作りやう. 1-20, 東京, 実業之日本社, 1952 ; 青空文庫, 2013.
- 8) Kei M. : *Bibliography of English-Language Tanka*, Version 2013. 06. 05. 1-65, Elkton MD, Keibooks, 2013.
- 9) Maffei, L. : August 2016 Issue 27. American Tanka. <http://www.americantanka.com/> (参照

- 2016-11-30).
- 10) Tanka Society of America: Sanford Goldstein International Tanka Contest. Tanka Society of America.  
<http://www.tankasocietyofamerica.org/tsa-contest/>, (参照 2016-11-28).
  - 11) Tanka Society of America: Ribbons: Tanka Society of America Journal. Tanka Society of America.  
<http://www.tankasocietyofamerica.org/ribbons/>, (参照 2016-11-29).
  - 12) Tanka Society of America: *Tanka Teachers Guide*. 1-104, Baltimore Maryland, Modern English Tanka Press, 2007.
  - 13) Emrich J.: A Quick Start Guide to Writing Tanka. Denis M. Garrison (eds.): *Tanka Teachers Guide*. Baltimore Maryland, Modern English Tanka Press, 49-50, 2007.
  - 14) Hansen E.C.: *Successful Qualitative Health Research*. 54-56, NSW Australia, Allen&Unwin, 2006.
  - 15) O'Donoghue T., Punch K.: *Qualitative Educational Research in Action*. 78-80, London, Routledge Falmer, 2003.
  - 16) 清水敦彦: 老人・障害者の心理と介護の在り方についての考察 II: 老婦人の手記にみる「生き方」を中心に. 足利短期大学研究紀要, 21(1): 1-7 (漢数字), 2001.
  - 17) 森川千鶴子: 七夕題冊に表出された痴呆性高齢者の言語的表現能力の検討. 看護学統合研究, 6(1): 16-21, 2004.
  - 18) 近藤真紀子, 安田壽賀子, 細原正子, 他: 看護実践を詠んだ短歌を用いた授業による学生の学び. 香川県立保健医療大学雑誌, 2: 47-57, 2011.
  - 19) Moriyama M.: Sensory Awakening as a New Approach to Health Promotion. In: Muto, T., Nakahara, T., Nam, E. W. (eds.): *Asian Perspectives and Evidence on Health Promotion and Education*. 40-49, New York, Springer, 2011.

## Others

### **A trial of reporting daily experiences and senses for practitioners using Japanese Tanka as a model of organizing ideas**

Masaki Moriyama, MD, Ph D. <sup>1)</sup>

For health and nursing practitioners working in the field, important knowledge comes not only from manipulating systematically collected data but also from lively daily experience. Recently, as the advancement of systemic and evidence-based approach, most of Japanese academic societies only value to write orthodox academic papers under the formal process of systematic data collection and analysis. However, writing reports reflecting personal experience and sensory feelings are important to observe details of daily life, discover something new, and construct new knowledge. In this research, the author adopted Japanese Tanka as a model of writing reports for students and practitioners to record and publish personal, sensory experiences when they encounter new situations in their life.

As a result, a worksheet was newly developed. In this worksheet, practitioners are guided to report one's experiences as the following sequence, 1) the core of new experience (and senses) as a result to be reported, 2) reflections and discussions to the experience, 3) introductory comments to the experience, 4) methods and conditions contributed to the experience, 5) referenced discussions, and 6) appropriate title to describe the whole report.

After development, the worksheet was further applied to two example situations. In order to write meaningful reports by the use of this worksheet, in addition to usual logical thinking, sensory thinking process should be trained and refined.

**Key words: Tanka, experience, sense, report writing, method development**

---

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing